



インド放浪

齋藤 博明
TAC 取締役社長

私は東北大学に入学すると「人は何のために生きるのか」に悩みました。問いの答えを求めて座禅を始めた私は、釈迦が悟りを得たインドに憧れました。

大学3年生の時、私は一人でインドを放浪しました。デリー空港から一步を踏み出した私は、大勢

の子供たちに囲まれていました。「バグジー」と手を差し出す子供たちから逃げようと駆け出すと、一団となった子供たちに追われました。何も食べていないはずの彼らの足の速さに驚嘆しました。私はデカン高原で一人の老人に会いました。彼は顔に皺を深く刻み、牛の尻を叩いては井戸水を畑

に灌水して

ました。大地が夕日に赤く染まる頃、突然私は自分がいかに恵まれた存在であったのかに気がきました。いまの時代の日本という国に生命を授かった幸運を、私は魂の奥底から感じたのでした。私

は、日本に帰れたら、生命のある限り精一杯に生きること

をデカンの大地に誓いました。当時バングラデシュは独立して1年しか経っておらず、危険な国でした。私はカル

カッタからダッカに向かいま隙間が空くと、格安料金で人間を乗せてくれました。独立

戦争の老雄が操縦するプロペラ機は、何度も落下しそうになりながらダッカ空港に着陸しました。私は空港で青年に金を出すように脅され、言われるままに金を渡しました。金は無くなったけれど、生命は無事でした。

私はダッカで唯一の仏教寺院に宿泊しました。独立戦争で荒れ廃れた寺院でした。そこに日本大使館の職員が、日本人青年の遺骸を運んできました。一等列車でダッカを目指していた彼は、列車強盗に金を渡すように要求され、一瞬ためらった時に銃で撃たれたのでした。私は生が死に隣接する偶然



「私はダッカ（バングラデシュ）の後、バンコク（タイ）の寺院に居候しました。この写真は、その時のものです」（筆者）

であることを知り、強い心で生き

